

運動の動詞について¹

はじめに

§1 運動の動詞が、スラヴ諸語においてさまざまな統辞論的、形態論的あるいは語彙論的な特徴を有し、特殊な群を構成していることは、夙に周知の事実である。この種の動詞の意義については、筆者も既に若干触れるところがあった。特に拙稿「行為の質について」⁽¹⁾において、私見を若干具体的な形で述べた。この小論は、そこで述べた考え方が、この種の動詞の呈する種々の特異な現象の説明に、どの程度有効であるかを、検証することを以ってその趣旨としている。

§2 運動の動詞の意義的特性についての着想は、「行為の認定に要する時間」⁽²⁾との関連における、不定動詞の意義についての考察をその端緒としている。拙稿「状態動詞について」において、筆者は次のように述べた⁽³⁾。

「文法書を繙けば、通常定動詞が『一定方向の運動』をあらわすのに対して、不定運動は『不定方向の運動』を示すとされる。しかし一考すれば直ちに明らかになるように、『同時に不定方向に行われる運動』などは存在しない。」「事実はそうではない。一定方向に飛ぶものが、やがて方向を変え、更にまた方向を変える、という運動形態をとることが確認されてはじめて『不定方向の運動』なる概念の成立をみるのである。従って不定動詞のばあい、定動詞におけるより遙かに大きな『行為の認定の時間』が必要とされると予想される。従ってまた不定動詞の方が一般に概念の抽象度が高いといえることができる。」

§3 このような考えに立つて拙稿「行為の質について」において、不定動詞の意義を次のように考えた。

「不定動詞は、定動詞によってあらわされる、方向を異にする運動の組合せと考えることができる。そこでいまベクトル $\mathfrak{R}_{i+1}$ の起点がベクトル $\mathfrak{R}_i$ の終点となるようなベクトルの列 $\mathfrak{R} = (\mathfrak{R}_1, \mathfrak{R}_2, \dots, \mathfrak{R}_n)$ を考え、この上を運動する対象のあらわす行為を、不定動詞の表わす行為とする。対象 x の軌跡を $\mathfrak{R}_x, \mathfrak{R}_y$ とあらわすとすれば、不定動詞の意義は、さしあたり次のようにあらわすことができる。

$$V(\text{itr. mov. indet.}): [dS_x, \mathfrak{S}_x \cdot K]$$

$$V(\text{tr. mov. indet.}): [dS_x, dS_y, \mathfrak{S}_y \cdot K]$$

これに対して定動詞の意義は、次のようなものと考えられる。

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』 第11号 1979年10月 101-112頁。

V(itr. mov. det.): $[dS_x, \mathfrak{R}_x \cdot K]$

V(tr. mov. det.): $[dS_x, dS_y, \mathfrak{R}_y \cdot K]^{(4)}$

§4 ところで運動の動詞にどのようなものが所属するかについては、必ずしも諸家の見解は一致していない。アカデミー文法は15組、ヴィノグラードフは11組、フォーサイスは13組の動詞を挙げているのである。

これらの諸家に共通なものは、次の10組の動詞である。即ち бежать/бегать, везти/возить, вести/водить, ехать/ездить, идти/ходить, лезть/лазить, лететь/летать, нести/носить, ползти/ползать, плыть/плавать。これに対して比較的多くの研究者が運動の動詞として認めているものに брести/бродить, гнать/гонять の二組の動詞があり、更に人によっては тащить/таскать および катить/катать の二組をもこれに算入している。アカデミーの文法が сажать/посадиться をもこれに加えているのは、理解に苦しむところである。

本 論

単純動詞

§5 定動詞と不定動詞が、いわゆる「一定方向の運動」並びに「不定方向の運動」をあらわす場合には、上述の意義構造の典型的なあらわれである。たとえば、

1. Мальчик бегаёт в саду.

「子どもが庭を走り回っている。」²

2. В смятение сваха к ней бежит.

「仲人婆さんが泡を食って彼女の所に走っていく。」

3. Я ехал на перекладных из Тифлиса. (Лерм.)

「私はチフリスから駅馬車に乗って行くところだった。」

4. София Львовна все ездила на извозчике и просила мужа, чтобы он покатал ее на тройке. (Чех.)

「ソフィア・リヴォヴナはいつも辻馬車に乗っていたので、トロイカ(三頭立ての馬車)に乗せてくれるように夫に頼んでいた。」

5. Я дам интересный журнал, вы его прочитаете, пока будете лететь на конференцию. (Муравьева)

²発表したときは日本ロシア文学会の紀要であつたので、訳は付けなかったが、再録するに当たり、すべてその訳を付けることにした。

「面白い雑誌を貸してあげよう。会議に行く飛行機の中で読んで御覧なさい。」

6. Обождет — сказала Фрося, — ты ведь недолго будешь ходить.

(Платонов)

「待ちますわ、とフローシャはいった。そんなに長くお歩きにならないでしょ。」

例 (6) は次節に述べる往復をあらわす場合とも考えられる。

定動詞の現在形が近い未来における予定をあらわす場合があるが、これも上述の規定の例外をなすものではない。

7. Завтра я еду в Киев. (Мурав.)

「明日私はキエフに行きます。」

§6 不定動詞に特徴的な用法として、往復をあらわすものがある。たとえば、

8. Вчера мать ходила на почту и получила деньги по переводу.

(Аникина)

「昨日母は郵便局に行って為替のお金を受け取ってきた。」

9. Утром на рынок бегала Арбузов.

「アルブーゾフは朝、市場に走って行って来た。」

この種の用法は $\mathfrak{S}_x = (\mathfrak{R}_{1x}, \mathfrak{R}_{2x})$ でかつ $\mathfrak{R}_{2x} = -\mathfrak{R}_{1x}$ という場合であると解することができる。従って $\mathfrak{R}_{1x} + \mathfrak{R}_{2x} = 0$ であって、対象 x の位置は出発時と変わらない。これを一般化して $\mathfrak{S}_x = ((\mathfrak{R}_{1x}, \mathfrak{R}_{2x}), (\mathfrak{R}_{3x}, \mathfrak{R}_{4x}), \dots, (\mathfrak{R}_{(n-1)x}, \mathfrak{R}_{nx}))$ とし、 $\mathfrak{R}_{ix} = -\mathfrak{R}_{(i-1)x} (1 \leq i \leq n)$ とすれば、これは多回的な往復運動をあらわすことになる。例えば、

10. Каждый день мальчик ходит в школу.

「子どもは毎日学校に通っている。」

これに対し定動詞は、one-way action をあらわす。

11. Он идет в школу.

「彼は学校に行くところだった。」

この相違はたとえば次のような場合によく表わされている。

12. Когда я ехал к брату, я купил чудесную дыню.

「私が弟の所に行く途中、すばらしいメロンを買った。」

13. Когда я ездил к брату, я купил чудесную дыню

「私が弟の所に行った帰り、すばらしいメロンを買った。」

主文章の行為は例 (12) においては、往路に、例 (13) においては帰路に行われている。
また往路をあらわす場合でも、往路と帰路とが別々に表現されるときには、当然定動詞であらわされる。たとえば、

14. Когда я тороплюсь, я беру такси и еду на работу. После занятий я иду домой. (Мурав.)

「私は急ぐときタクシーを拾って仕事に行く。仕事のあとでは歩いて帰る。」

§7 不定動詞にはこの外職業的行為、習慣的行為、経験、能力等をあらわすことがある。このうち経験をあらわすものは、上述の往復運動の特殊な例と考えることができる。たとえば一回しか行われなかった行為でも、経験についての問乃至答えの行われる状況は、経験者の位置に関りがなく、ベクトルの和が等しいと置かれるからである。たとえば、

15. Вы летали когда-нибудь на Камчатку? Раз я летал.

「あなたはカムチャツカに行ったことがありますか。一度あります。」

職業的行為、習慣的行為などは、 $\mathfrak{S}_x = (\mathfrak{A}_{1x}, \mathfrak{A}_{2x}, \mathfrak{A}_{3x}, \mathfrak{A}_{4x} \cdots \mathfrak{A}_{(n-1)x}, \mathfrak{A}_{nx})$ の $n \rightarrow \infty$ の場合だと解することができる。たとえば、

16. Шофер водит машину.

「運転手が自動車を運転する。」

17. Мы с женой ходим в театр раз в месяц.

「私と妻とは月一回観劇に行きます。」

$n \rightarrow \infty$ になると $\mathfrak{S}_x$ は一つのコンパクトな行為として意識され、ベクトルとしての方向性を喪失する。

§8 ところで習慣的あるいは反復的行為の表現は、不定動詞にのみ許されている訳ではない。定動詞もまたこの種の行為を表現し得るのである。例えば、

18. Обычно я иду с работы пешком, а на работу еду на автобусе. (Мурав.)

「私はいつも仕事からは歩いて帰るが、仕事にはバスで行く。」

19. По утрам я встаю рано и иду во двор делать гимнастику, а потом бегу на речку купаться. (Мурав.)

「毎朝私は早起きして庭に行って体操をし、そのあと走って小川に水浴びに行く。」

前節の例と比較すれば直ちに明らかになるように、ここで用いられている定動詞は、何れも一定方向の反復をあらわしている。したがって行為の反復という意義は、定動詞あるいは不定動詞の範疇と、直接に関連しているものではないことが知られる。

§9 ロシア語の言語意識において、運動の方向が異なれば、同一の運動であっても質の異なるものとして、即ち異なった運動であるとして観念せられるとすれば、定動詞が命令法においてすでに進行しつつある行為の進行に関する命令をあらわす場合に用いられることも、よく説明できる。たとえば、

20. Так вот ты ходи и смотри Читу... Увидишь Читу... позовайся и иди дальше.

「それじゃチタを見て回りなさい。チタを見たらさよならして次に進みなさい。」

この場合明らかに運動の方向性は、発話の時点で行われている運動と異っていないことが含意されている。

この種の用法は、否定の **не** を伴うときに特に著しく、また用例も豊富である。これは否定命令に不定動詞が用いられることが通則となっていることから、これとの対比によってその本来の機能がより鮮明になった結果であると考えられる。たとえば、

21. Не иди по солнцу: тебе вредно!

「太陽に向かっていくな。体によくないぞ。」

22. Не плыви туда: там глубоко! (Мурав.)

「そちらに泳いで行くな。そこは深いぞ。」

これは相手がすでに **идти** 乃至は **плыть** の行為を現に行っていることが、前提となっている場合である。

更に運動の速度に対する命令も、定動詞によって示される。この場合にも運動の方向は、発話の時点において行われつつある運動の方向と何等異なるところがない。たとえば、

23. Не идите так быстро, у нас еще есть время. (Мурав.)

「そんなに急いで歩かないでください。まだ時間はありますから。」

24. Не беги так, я не успеваю за тобой. (Мурав.)

「そんなに走るな。ついて行けないよ。」

§10 一般的な否定命令は、不定動詞を用いるのが通則となっている。たとえば、

25. Летите в Одессу на самолете! (Мурав.)

「飛行機でオデッサへ行きなさい。」

26. Не летайте на самолете, вам вредно. (Мурав.)

「飛行機に乗るな。体に悪いぞ。」

これは先に述べた不定動詞における方向性の喪失と関連していると考えられる。言語における否定の問題は、軽々に扱うべきものではないが、具体的な行為が存在しないという意味で、否定の не を伴う動詞がより抽象的な性格を帯び易いということだけは、少くとも言い得るであろう。

§11 定動詞の命令法は、しばしば勧奨の意味をもって使用される。この用法は不定動詞との対比というよりは、むしろ完了体動詞との対比において、論ぜられるべきものと思われる。しかしこの場合にも、方向性乃至目的地への運動という性格は、依然として顕著である。

27. Говорю, иди к нам на экскаватор, забудь свои обиды... (Арбуз.)

「いいかい。私たちの所に来て掘削機械をやれ。腹の立つことは忘れる。」

28. Скорее... только скорее езжайте, Иди на Грохольском... или у скрипача, в Кисловском. Скорее. Только скорее езжайте. (Семенов)

「早く、どうか早く行ってください。ゴロホリスコエ村へ、又はキスロフスコエのヴァイオリン弾きの所に。とにかく急いでください。」

定動詞の一人称複数形が勧奨の意味で用いられる場合も、これと同様である。

29. Ты куда меня ведешь? Идем, Не разговарывай. (Тендряков)

「どこに連れていくのですか。ペチャクチャいわずに行くんだ。」

これに対して不定動詞の命令法が肯定命令をあらわすのは、主として俗語的表現に限られている。たとえば、

30. Пришел, ваше благородие. Ну, зови — слышался сердитый голос. В дверь ходите — сказал солдат и тотчас же взялся за самовар. (Л. Н. Толстой)

「来ました、閣下。じゃあ呼べ、— 怒った声が聞こえた。ドアから入ってください、と兵士は言ってすぐにサモワールに取りかかった。」

不定動詞のこの用法は、この種の動詞の意義が抽象化し、一般の動詞の意義と異ならないと感じられた為に可能となったのかも知れない。

前綴動詞

§12 定動詞を派生原基とする前綴動詞が完了体動詞となることは、周知の通りである。これに対して不定動詞を派生原基とするものは、原則として定動詞から派生される完了体動詞に対応する完了体動詞を作るとされる。またこのようにして成立された前綴動詞には、最早や定・不定の区別は存在しないというのが、一般的な説明である。

確かに一方では不定動詞を原基とする前綴動詞が、完了体動詞に転化する場合のあることも、よく知られた事実である。しかし上述のような体の対応が、定動詞及び不定動詞を原基とする前綴動詞の一つの特徴であることが強調される余り、不定動詞を原基とする完了体動詞が、いわば副次的な意義しか担っていないかのような印象を与えてきたこともまた事実である。

しかし実際にはこの種の動詞の数は、意外に多いことが知られるのである。

§13 図 0.1 で I 類としたのは、接頭辞の附加によって完了体動詞と完了体動詞の何れをも派生し得るものである。II および III 類は何れも完了体動詞のみを派生する。このうち III 類は語基に多回体接尾辞を附加して成った IV 類と、体の派生に関して相補分布をなしている。

類		派生原基	不完了体		完了体	
I	A		語	%	語	%
		-водить	28	64	16	36
		-возить	16	52	15	48
		-гонять	18	64	10	36
		-летать	17	63	10	37
		-носить	29	64	16	36
	-ходить	23	58	17	42	
	B	-лазить	5	38	8	62
-бродить		2	17	10	83	
II		-плавать	0	0	8	100
		-таскать	0	0	17	100
III		-бегать	0	0	13	100
		-ездить	0	0	15	100
		-ползать	0	0	10	100
IV		-бегать	16	100	0	0
		-ездить	15	100	0	0
		-ползать	14	100	0	0

図 0.1: 前綴動詞

I 類の語基のうち、接頭辞によって完了体動詞を派生するものは、-бродить, -лазить を除いてすべて対応の完了体動詞を、定動詞の原基から派生する。I A 類である。たとえば、приводить/привести, привозить/привезти, пригонять/пригнать, прилетать/прилететь, приносить/принести, приходить/прийти などである。

これに対し I B 類の лазить から派生される完了体動詞は、定動詞 лезть に接尾辞を附加して成った -лезать によって、ほとんど代替されている。たとえば、перелазить/перелезть, пролазить/пролезть, слазить/слезть, вылазить/вылезать などである。この点でこの動詞は III 類に近いといえよう。

同じく I B 類に属する -бродить は колобродить, сумасбродить のように様態を示す合成語を除けば、すべて完了体動詞を派生する。бродить に対応する брести を原基とする完了体動詞は、不完了体動詞として -брехать を原基とする動詞を使用する。たとえば взбредить/взбрести, выбредить/выбрести, добредить/добрести, забредить/забрести, набредить/набрести, перебрехать/перебрести。

§14 II 類の -плавать, -таскать は、何れも接頭辞を附加して完了体動詞を作る。これに対する定動詞 плыть, тащить を原基とする前綴完了体動詞に対応する不完了体動詞は、何れも二次派生の -плыть, -таскать を原基としている。

III 類の動詞を原基とするものは、何れも完了体動詞であり、かつ多回体接尾辞によって IV 類の原基を派生するものである。

IV 類の動詞を原基とするものは、III 類の動詞に対応する定動詞を原基とする完了体動詞と体に関して対応している。

以上が派生原基についての大きな説明である。

§15 次に問題とすべきは、派生の原基と接頭辞との関係である。紙幅の関係で細部にわたって論ずることが許されないので、以下大きな説明に留めざるを得ないことを、ここで断っておきたい。

まず -бегать から派生されるものは、-бежать から派生される完了体動詞に対応する不完了体動詞である。これに対して -бегать を派生の原基とするものは、原則として対応の不完了体動詞を有しない perfectiva tantum である。この両者に共通する接頭辞には、вы-, до-, за-, из-, на-, об-, о-, от-, пере-, про-, с-, у- がある。その意義を考察すれば、次の通りである。

выбегать 「走り出る」/выбегать 「走りまわる」、забегать 「駆け込む」/забегать 「あちこち駆け回り始める」、избегать 「避ける」/избегать 「走り回る」、набегать 「衝突する」/набегать 「走って足跡を残す」、обегать 「周囲を走りめぐる」/обегать 「走りまわる」、отбегать 「走り退く」/отбегать 「走り終る」、перебегать 「超えて走る」/перебегать 「走っているいろいろな所に行く」、пробегать 「走り過ぎる、走り通す」/пробегать 「走りまわって過す」、сбегать 「駆けて行って来る」。

このような意味的な相異は -езжать を派生原基とするものと、-ездить を派生原基とするものの間、あるいは -ползать と -пóлзать を派生原基とするものにもみとめられる。紙幅の関係で、これらについては、対応を示すだけにとどめる。

выезжать/выездить, доезжать/доездить, заезжать/заездить, наезжать/наездить, объезжать/объездить, отъезжать/отъездить, переезжать/переездить, подъезжать/подъездить, приезжать/приездить, проезжать/проездить, съезжать/съездить, уезжать/уездить, выползать/выползать, запóл-

зять/заползать, напóлзать/наползать, опóлзать/оползать, отпóлзать/отползать, перепóлзать/переползать, пропóлзать/проползать, спóлзать/сползать.

§16 以上の例から -бегать, -ездить, -ползать を原基とするものは、不定動詞の特徴をなす、方向を異にする運動の組合せによる、複合的な運動をあらわす意義を保存しているといえることができる。これに対して -бегать, -езжать, -ползать を派生原基とするものは、同一方向でかつ単一の運動をあらわす定動詞の特徴を示す。

しかしたとえば выезжать/выездить, выезжать/выехать のように выезжать が相異なる対偶の双方に共通であることからすれば、この種の動詞が定動詞の特徴を帯びるのは、これらの動詞に固有の意義によるものではなく、偏にこれが定動詞を原基とする完了体動詞と対偶をなすためであろうと考えられる。

§17 II 類に属する -плавать, -таскать も接頭辞を伴うとき、すべて完了体動詞となる。このときにも、原基の不定動詞としての意義的特徴は、原則として保存されている。たとえば заплáвать「泳ぎはじめる」、исаплáвать「泳いで多くの場所に行く」、вытáскасть「次々と引出す」、истáскасть「着破る」のような場合である。

このようにして -плавать, -таскать を派生原基とするものと、-плыть, -тащить を原基とするもののあいだには、不定動詞と定動詞の意義的特徴の相異が基本的には保存されているといえることができる。

このように -плавать, -таскать を派生原基とするものが、すべて完了体動詞であることから、これを проплыть, протащить のような完了体動詞に対応する不完了体動詞の原基とすることは、できなくなる。この役割を果たしたのは、定動詞に多回体接尾辞を付して成った -плывать, -таскивать である。

§18 I B 類に属する -лазить を原基とするものには、完了体動詞と不完了体動詞がある。しかし不完了体動詞となるものは、多回体接尾辞による -лезать と同義として扱われ、定動詞を原基とするものと、対の対偶をなしている。たとえば влáзить/влезть, вылáзить/вылезть にみられる通りである。しかも -лазить の形はすでに現在では稀用である。

また -бродить の場合にも、定動詞 брести を原基とする完了体動詞に対応する不完了体動詞は、何れも多回体接尾辞によって定動詞から派生した бредать を原基としている。

このことから I B 類の動詞は II 類の動詞に極めて近いといえることができる。-лазить, -бродить, -плавать, -таскать に対して、-лезть/-лезть, -бредать/-брести, -плывать/-плыть, -таскивать/-таскать という体の対応が存在することは、第一にこの類に属する定動詞と不定動詞とが語彙的に分化しつつあること、および第二に定動詞

を原基とする完了体動詞が二次派生による不完了体動詞を対偶とすることによって、一般動詞に近づきつつあることを、示している。

これらの場合にも、不定動詞を原基とする前綴完了体動詞が、何れも不定動詞の意義特徴を保存していることは、いう迄もない。念のために若干の語を挙げれば、次の通りである。

наплавать, отплавать, переплавать, поплавать, проплавать, сплавать; на-
таскать, растаскать, протаскать, повытаскать, поистаскать, понатаскать,
порастаскать; вылазить, залазить, облазить, отлазить, пролазить, слазить;
выбродить, забродить, избродить, перебродить, пробродить.

§19 I A 類の動詞は完了体動詞、不完了体動詞の何れをも派生する。この類の特徴は、不完了体動詞が、定動詞を原基とする完了体動詞と体に関する対偶をなすことである。たとえば проходить (不完) に対応する完了体は пройти である。

他方完了体動詞となるものは、これまで観察して来た場合と同じく、不定動詞の意義特徴を保存している。たとえば переходить「遍歴する」、сходить「行つて来る」の如くである。また完了体の проходить は「ある時間あるきまわる」という意義をもっているが、пройти に対応する проходить は「歩き通す」という意味である。このことから後者の場合には定動詞の意義をもつことが知られる。これは、この動詞が пройти と対応関係に入っているために生じたものと察せられるが、何れにせよ、I A 類の動詞を原基とする前綴完了体動詞は、何れも定・不定動詞の意義と体に関して homonymie を構成する、ということができる。

§20 以上述べたことから、一般に不定動詞を原基とする前綴完了体動詞は不定動詞の意義を保存する、と結論することができる。

これを完了体不定動詞 perfectiva indeterminata と称することにし、この命名法を一般化すれば次のようになる。

1. 完了体不定動詞 переводить「多数を案内する」
2. 不完了体不定動詞 перевозать「同上」
3. 完了体定動詞 перевести「渡す」
4. 不完了体定動詞 перевести「同上」

前綴について

§21 これらの動詞について附加される前綴を中心に観察すれば、いくつかの特徴がみられる。

たとえば始発を示す за- は、完了体不定動詞のみを派生する。заводить「動かし始める」、забродить「うろつき始める」、забегать「あちこち駆まわり始める」等である。

これらの動詞が不定動詞の意義を保存しているか、若しくは少くとも行為の方向性に関して中立であることは、明らかである。

これに対し *за-* が本筋を逸れた行為をあらわす場合は、完了体及び不完了体定動詞に用いられる。たとえば *забредать/забрести* 「道に迷ってある所に出る」、*забегать/забежать* 「一寸立寄る」、*заезжать/заехать* 「回り路して乗ってゆく」のようなものである。これらの動詞が何れも方向性をもった運動を表すことに疑いはない。

このように *за-* が一般的な行為の始発を示すために、定動詞について始発の意味をあらわすことができないところから、定動詞の始発は *по-* によってあらわされる。その理由は *по-* が本来「物に沿う」意義を有していたからであると推察される。たとえば *побежать, повезти* である。したがって逆に *по-* は定動詞の場合にしか、「始発」の意義をあらわすことができない。*по-* が不定動詞に附加せられて「しばらく」の意味を持つのは、このためである。たとえば *полетать, поплавать* である。これらは完了体不定動詞のカテゴリーに属している。

§22 同様にたとえば *от-* が完了体不定動詞を派生して運動の終焉をあらわし、完了体定動詞として「分離、離脱」の意義を示すことも、よく説明できる。

このように種々の前綴についてその意義を検討すれば、各々の動詞はそれが不定動詞であるか定動詞であるかに従って、自己の意義と矛盾しない意義を有する前綴をとり、あるいは同一前綴の意義の中で、矛盾しない意義を選択するということが知られる。

この点で特に興味のあるのは、前綴 *с-* の場合である。定動詞に附加される時、これは「表面からの離脱」乃至「下降」の意義をもつのに対し、完了体不定動詞として用いられるときには、典型的な *two-way action* を示すからである。たとえば *сбегать* 「走って行って来る」、*сводить* 「連れて行き、連れて帰る」、*свозить* 「乗り物で運び行き、運び帰る」、*слетать* 「飛んで行き、飛んで帰る」の如くである。

結 語

§23 以上の考察から、定動詞と不定動詞の区別は、前綴動詞の場合にも保存されていることが明らかになったと思われる。完了体・不完了体というカテゴリーが、この現象にも密接な関連をもっていると思われるが、ここではこの問題に立入ることはしなかった。しかし完了体定動詞、不完了体不定動詞等の範疇が立ち得るとするならば、定動詞、不定動詞の区別をいわゆる「亜体」*подвид* とする考え方は、論理的に成立しなくなるとと思われる。体の範疇と定・不定動詞の範疇との関係については、新たな観点から考えることが必要とされよう。

文 献

- (1) 「行為の質について」、京都大学教養部紀要『人文』に発表の予定。(これについてはすでに発表済み。)
- (2) A Consideration on the Category of Transitivity in Russian. 『人文』第20集 昭和49(1974)年。
「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号 1976年。
- (3) 「状態動詞について」『古代ロシア研究』第12号 1978年。
- (4) この表記については、たとえば「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集 昭和52(1977)年 参照。

以上の外参考とした文献の主なものには、АИ СССР, *Грамматика русского языка*, т. II, М. 1960. をはじめとする文法書、並びに L. Muravyova, *Verbs of Motion in Russian*, Moscow 1975. がある。

VERBA MOVENDI

In hoc opusculo, positis hypothesibus quae ad proprietatem verborum movendi significationum pertinent, dissertum est ut inter ea verba, quae vulgo determinata seu unidirectionalia vocantur et ea, quae indeterminata sive multidirectionalia appellantur, distinctionem perficere tam in verbis simplicis, quam in verbis praefixis compositis, non solum idoneum, sed etiam necesse esse arbitror. Hinc discreta sunt verborum movendi genera quattuor: *verba perfectiva determinata*, *verba perfectiva indeterminata*, *verba imperfectiva determinata* atque *verba imperfectiva indeterminata*.